



連載

常陸時代の佐竹氏  
— 500 年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」  
の佐竹氏家紋

## 【第23回】

よしのぶ  
義宣の「関ヶ原合戦」1 道路沿いに立つ  
東西両軍の幟旗

JR東海道本線関ヶ原駅は岐阜県不破郡関ヶ原町にある。同本線大垣駅方面から関ヶ原駅に向かう。車窓からは小雨にけむる田んぼと山並み、点在する家並みが見える。見慣れた田舎の風景である。ところが関ヶ原駅を降りると周囲の景色が一変する。同駅正面入り口の左右に幟旗（以下旗と略）が林立している。旗は同駅脇を走る県道関ヶ原停車場線の両側にも立っている。同県道は東海道本線をまたいで関ヶ原古戦場に伸びている。

なんと言っても目を引くのは道路沿いに林立する旗である。旗は関ヶ原合戦に参陣した武将の旗である。県道脇の関ヶ原駅を起点に同古戦場に向かって右側に「東軍」、左側に「西軍」の武将の旗が等間隔で立っている。旗の列は関ヶ原歴史民俗学習館駐車場まで約7－800本に及ぶ。本数は東・西両軍合わせて約50本。「イベントがあると、増えたりする」（関ヶ原町地域振興課）という。

ここに立つ旗は関ヶ原合戦に参陣した武将たちだけである。同合戦に加わらなかった「佐竹義宣や上杉景勝、伊達政宗、最上義光らの旗はない」（同課）。同駅脇の県道沿いに立つ旗の最初は東軍が「徳川家康」、西軍は「石田三成」である。それらの旗が立つ関ヶ原は常陸国からみると、いかにも遠い。義宣はこの合戦にどうかかわったのか。

## 2 「五大老」に対する討伐の動き

秀吉亡き後の豊臣政権は、「五大老」の一人、前田利家の逝去に続く加藤清正ら「武断派七将」による石田三成襲撃事件で一気に流動化した。この情勢下、主導権を握った人物が江戸城（東京都千代田区）を拠点に「貳百四拾万貳千（240万2千）石」（『慶長三年大名帳』）を有した徳川家康だった。家康は五大老筆頭として慶長4年（1599）9月、伏見城から秀吉の遺児・秀頼が住む大阪城に入った。

大坂城に入った家康は自らへの求心力を高めるため次々に対抗勢力へ圧力をかけ始めた。その最初の相手が利家の跡を継いで加賀「123万石」（『同大名帳』）を領した前田利長だった。利長に「謀反の疑いありとして家康は討伐軍を派遣しようとした。しかし、あわてた利長は母を人質に出し、家康への服従を誓った」（『結城市史・第四巻古代中世編』）。

次に狙った人物が同じ五大老の一人上杉景勝だった。景勝は秀吉在世中の慶長3年（1598）、越後国（新潟県）から会津（福島県会津若松市）へ120万石で移封された。会津に入った景勝は新領地の経営につとめ、「城を修築し、道路を整え、橋をかけ、浪人を招いて家臣を増やし武器を調べた」（『結城市史・同』）。近隣大名からこの情報を得た家康は景勝に謀反の疑いを抱き、慶長5年（1600）、「早々の上洛」を要求した。

## 3 家康からの上杉討伐要請

これに対し景勝は上洛の延期を求め、要求を断った。母が明かないとみた家康は慶長5年6月、景勝討伐のため大阪を出立した。その1ヶ月前、義宣にも家康から上杉討伐の出陣要請が届いた。『佐竹家譜』は同年5月（日付けなし）条で「内府檄を常州移して曰く、上杉景勝を征せんが為に、内府自ら東す。義宣兵を率て宜く奥州仙道口に発向すべしと」記す。「仙道口」は福島県白河市付近を指す。

義宣は、家康の要請を受け景勝討伐のため居城の水戸城（茨城県水戸市）を出立し、赤館城（福島県棚倉町）へ出向いた。それから約2ヶ月後の同年8月25日条で『佐竹家譜』は「義宣赤館より帰陣」と書く。『佐竹家譜』が伝える赤館から水戸への往復にかかった約2ヶ月間が義宣の「関ヶ原合戦」であった。赤館城は領内にある。義宣は自らの領地を一步も出ることなく、歴史の転換点で佐竹氏の将来を決める選択肢と向き合った。



その選択に大きな影響を与えた人物が石田三成、上杉景勝、徳川家康である。義宣の2ヶ月間の行動からわかることが二つある。一つは家康からの要請に基づく上杉討伐に従って仙道口に向かったこと。二つ目はその要請を途中で無視し、水戸城に戻ってきたこと。義宣はなぜ北上を止めて居城に戻ってきたのか。この二つ目の行動は家康の意向に反する行動である。そう見られることを分かっているながら義宣は帰還を選択した。

#### 4 三成からの家康弾劾状届く

赤館城へ向かっていた義宣に三成からの書状が届けられた。『佐竹家譜』は7月21日条で「此に於て毛利輝元卿（中納言）及び石田三成等の諸奉行、兼如（連歌師）を常州に下向せしめ、連署を義宣に寄て曰く、頃日家康先君の遺命を無し、幼君を軽じ、隠謀を企て、恣に干戈を起す。故に諸国に仰せて是を征伐す。義宣早く兵を起し、上杉景勝に謀し合せ、速に家康親子を誅戮せしむべし」と書く。

これを受けて7月24日条の『佐竹家譜』は義宣が家臣の須田盛秀に書状を送り「急度申遣候」わし「若はや野陣へ打出候事者（一部略）無用に候」と、赤館城以北への出陣停止を含めそこに留まるよう命じたとある。2日後の26日には大坂屋敷の家臣大綱義辰に「何様に成すとも秀頼様御座被成候所に被有付候（以下略）」と、いかようになろうとも秀頼に従うよう命じている。

また、「うえさまより被下候雪の絵、広瀬出雲へあづけ置候。これをとりて古田織部へわたし候可候。又金五十五枚さし上候」と、義宣は世話になった茶人古田織部へ秀吉から賜った「雪の絵」と金子を渡すよう命じている。茶の師匠であった織部に対する行為からこれまでの恩義に報いたい気持ちと何かを決意したかのような思いがにじむ記述である。

#### 5 上杉景勝との「密約」説とは

『佐竹家譜』が伝える義宣の行動の背景に何があったのか。『水戸市史・上巻』は家康弾劾状を受け取った義宣が「族宿将を集めて去就を協議したが、石田方に応ずるべしとするもの、徳川方に付くべしとするものが対立し、決まらなかった」と伝えている。さらに家康から忠誠の証として

「弟芦名盛重・岩城貞隆、または妹を証人として差し出すことを命じてきた」と述べている。

これに対する義宣の答えを『水戸市史・同』は以下のように記す。「家康の使者に自分も家康と同じく秀頼に忠誠を尽すものであるから、母と妻子を故太閤の時から伏見に証人として出している。今更、別にどうして人質を家康に差し出す必要がある」と断った。そのうえで義宣は「上杉方に急使を送ってこの事を告げ、家康と手切れを予想して、上杉方の援兵を求めたのである」と。

佐竹氏と上杉氏の「密約」とはこの援兵要請を指していると考えられる。義宣は家康と手切れになった時、身内の軍勢では抗しきれないと判断し、景勝に援軍を求めたとみられる。義宣は家康への備えを固めるため水戸城に戻ったのであろう。しかし、家康は義宣が自ら進んで動かないことや景勝も最上義光勢との戦で身動きがとれないとみて江戸城を出て西上の途についた。景勝との「密約」とは、家康の要請を無視した義宣が家康の反撃に備えるためにとった防衛策だったと筆者はみている。

歴史ジャーナリスト  
茨城県郷土文化研究会会長  
富山 章一



JR 関ヶ原駅から古戦場まで道路両側に立つ武将たちの幟旗＝岐阜県不破郡関ヶ原町